

L'Echange

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

L'Echange は、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の

FREEPAPER 第3号 2014年12月発行

交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

巻頭特集
● 陸軍とフランス
● 生活 京都日仏交流会
● 都市 隣人祭り
● 文化 写真家 甲斐扶佐義氏
● 風景 フランス革命記念日
● 食 伊地知雅シェフ

Spécial

Vie

Urban

Culture

Scène

Cuisine

L' Echange

巻頭
特集

第 3 号

陸軍とフランス

L'armée mikadonale et la France

制度と技術の移転から見た明治の陸軍遺産の再評価

2014年3月に、東京・日仏会館において、シンポジウム「陸軍とフランス」が開催されました。今回の巻頭特集では、明治時代以降の日仏交流とその文化遺産活用についての白熱した講演の様子をレポートします。

— シンポジウムの概要

2014年3月2日（日）、東京・恵比寿の日仏会館ホールにおいて日仏都市会議2014「陸軍とフランス：制度と技術の移転から見た明治の陸軍遺産の再評価（L'armée mikadonale et la France : Reévaluation du patrimoine militaire japonais au point du vue du transfert institutionnel et technique）」が開催されました。

日仏都市会議は、日仏工業技術会の建築都市委員会により定期的で開催される、日本とフランスの交流を目的とした建築や都市にかかわる国際シンポジウムです。

今回のシンポジウムは、明治時代に日本に建設された陸軍関連施設と歴史的背景を対象として、フランスとの関連性に光を当てることを目的として開催されました。

実行委員会委員長である東京理科大学・岩岡竜夫教授によれば、「文明開化や西欧化の流れの中で、明治期の学校建築のユニークなデザインは有名ですが、新しいシステムと技術の導入を図った軍事施設においても、その意匠、構法、空間構成などにおいて、非常に興味深いデザインがあるようです。軍事施設という、日本ではこれまであまり着目されなかったビルディングタイプに対して、約1世紀を経た現在、（中略）西欧の特にフランスからの影響が多であったことが解明されつつあり、そのことがこのシンポジウム開催の発端の一つです。」とのことでした。



写真：基調報告をする三宅理一副学長
(中島智章准教授撮影)

写真：シンポジウムの様子
(中島智章准教授撮影)



一 国際情勢と文化交流

当日10時に開催したシンポジウムは、恵泉女学院大学・荒又美陽教授による総司会で、岩岡教授、東京大学・高橋裕名誉教授及びフランス大使館科学技術参事官・ジャック・マルヴァル氏の挨拶に続いて、藤女子大学・三宅理一副学長による基調報告「新発田・白壁兵舎の保存とその歴史的意義」で幕を開けました。セッション1は工学院大学・中島智章准教授の司会により、国際情勢から見たフランスとアジアというテーマで行われ、防衛省防衛研究所戦史研究室長・立川京一氏による「フランスのアジア外交と軍事問題」、そして博物館学芸員による「フランス陸軍博物館をめぐる」という講演が行われました。セッション2はフランスからの技術移転と題され、相模女子大学・南明日香教授の司会により、パリ国立工芸院・アンドレ・ギエルム教授による「ナポレオン3世期の工兵技術と築城」、パリ国立工芸院博士課程・前島美知子氏による「明治の陸軍施設—ジュールダンからムージャンまで」、そして群馬県企画部世界遺産推進課長・松浦利隆氏による「産業技術とフランス—富岡製糸場」についての講演が行われました。

昼食をはさんだ後も、講演と議論は熱を帯びて続けました。セッション3は、芝浦工業大学・伊藤洋子教授の司会によって、日本国内の旧軍施設にスポットが当てられました。舞鶴市都市計画課長・矢谷明也氏による「海軍の建築」に関する講演を皮切りに、建築家・多田善昭氏による「善通寺の陸軍遺産」、工学院大学・後藤治理事による「国内の旧軍施設とその保護活用」、近畿大学・岡田昌彰教授による「日本における国防遺産の解釈」に関する講演が行われました。セッション4は日本イコモス国内委員会事務局長・矢野和之氏による司会で、歴史都市の計画と陸軍遺産～新発田というテーマで行われました。新発田市・下妻勇副市長による「新発田の歴史環境整備と陸軍遺産」、東京藝術大学・ヨコミゾマコト准教授による「新発田の新市庁舎と新発田城」、もば建築文化研究所副代表・中村文美氏による「文化遺産を活かした新発田のまちづくりの現在」に関する講演が行われました。

最後に、国立社会保証・人口問題研究所国際関係部長・林玲子氏による総括によって、シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。



一 白壁兵舎と新潟県新発田市

新発田市は、新潟県下越地方に位置する人口約10万人の市です。歴史的には新発田藩の城下町として栄えてきたため、現在でも旧下屋敷庭園清水園や、足軽長屋などの文化遺産や、歴史的な区割りや水路などが多く残されています。新発田の旧新発田城跡地は、白壁兵舎が1873年に建設された場所です。今年度、兵舎は修復・復原され、本シンポジウムが行われる契機となりました。今日でも日本各地には兵舎や司令部や砲台、航空基地に用いられた明治時代の旧陸軍の遺産が数多く残されていますが、白壁兵舎はその中でも最も初期の1873年から1874年にかけて、ジュールダンと中村重遠による標準設計に基づいて建設されたものです。標準設計とは、地方に兵舎等を建設する際に参考とするプロトタイプとなる設計図です。ジュールダンは、1872年に日本に招聘された第2次フランス軍事顧問団所属の工兵大尉でした。

白壁兵舎は、明治時代、陸軍歩兵第16聯隊、第116聯隊の兵舎として使用されていました。白壁兵舎の名称は、豪雪地帯のため雁木（豪雪地帯における伝統的な木造のアーケード）が設置され、壁面が白漆喰で塗られていたことによる通称でした。また、フランスの兵営を規範とした建築計画であったため、建物の構造にはフランスの海外領土で多用されたフレンチ・トラスと呼ばれる小屋組が採用されています。2007年から保存計画がスタートし、2014年春、修復・復原が完了した為、陸上自衛隊新発田駐屯地において、白壁兵舎広報史料館として公開・活用されています。

今回、このシンポジウムによって、明治時代における日本の国際化の潮流のなかでのフランスとの文化交流のあり方が改めて浮き彫りにされたと感じました。明治時代以降、近代化を急速に進めていった日本の礎に、フランスからの技術輸入がこのような大きな役割を果たしていたことには大変驚きました。また、現代においてフランスとの新たな形での文化交流のあり方を築く上で、白壁兵舎に代表される文化的なストックの活用が、未来への方向性を示しています。今後とも、両国においてこのような交流を積極的に推進していく必要を強く感じました。

（文責：江口久美）

写真：
上：ジャック・マルヴァル氏
（中島智章准教授撮影）
中：白壁兵舎
（青島啓太氏撮影）
下：江戸時代の足軽長屋
（青島啓太氏撮影）

L'ECHANGE

生活

VIE



ジャン＝ジャック・トルショ氏

パリ出身ですが、グルノーブルで育ちました。私は、庭園と緑地について専攻していました。ここ15年ほど、私はフランス留学・研究などに関する業務を行っています。

ジャン＝ジャック・トルショ氏インタビュー

京都日仏交流会

Les réunions de Kyoto

—トルショ氏が始めた京都日仏交流会に関して

交流会は、1997年から毎週水曜日夜に、京都のカフェ、オ・パカナルにて行っています。実は、パリにも1900年前後から交流会があります。これは、日本の外交官とパリのギメ東洋美術館を開いたギメ氏の関係から始まりました。この交流会では大変議論が深まりました。私がパリで働いていた時に、この交流会に参加しました。交流会は、パリ、レ・アルのオ・サン・ジャックというカフェで行なわれていました。私は京都に来た後も交流会を行いたかったので、このような形で開きました。この交流会の一番のコンセプトは「パートナー」です。パリには現在3つ、4つの異なる交流会がありますが、20年前にはたった一つ、1900年から続いているものだけしかありませんでした。

私は交流会を「組織」していません。私は組織したくはありません。何故なら、日本の方達はいつも全てが組織されていることを望むからです。私は交流会がフォーマット化されてしまうことを望みません。だから、本日（インタビュー日）の参加者は数名ですが、30名ほどの参加者があってカフェの奥までいっぱいになることもあります。毎週メンバーが異なっており、フランス人だけ、日本人だけの時もあれば、混ざっている事もあります。私は交流会の雰囲気には気を配っていますが、後は会が自発的に展開していくようにしています。ですから、日本語で話す事もあればフランス語で話す事もあります。話題も様々なものがあり、フランスの事であれば、モードや観光について話したり、政治について議論したりします。私は議題を決めて議論はしませんが、イメージでは、日本人もフランス人もが気軽に参加できる和気あいあいとした場をつくりたいと思っています。また、この会はフランス語を勉強する場でもありません。フランス語教師の方も参加していますが、夜までフランス語を教えたくはありません。むしろ、日仏の友人をつくる場です。フランスに行く時のアドバイスをもらう事もできます。この会はアソシアシオンのようなものではないので、最近是人手が足りず、手伝ってくれる日本人がいると助かります。というのは、人々は参加の際にむしろ受け身で、座って食べて話して終わりだからです。ですので、フェイスブックでもメッセージをくれる方はあまりいません。参加者は本当に様々で、学生、研究者、医者などです。フランス人同士では、議論が大変白熱することもあります。

将来は、たくさんの人々に来てほしいです。また、私も働いていて忙しいので、来るだけではなく盛り上げていくための情報発信などのお手伝いもしてほしいです。

—日本人読者へのメッセージ

フランス語を話すためには、たくさん話さなければいけません。たくさん話すためには、ここにぜひ来てください。

(聞き手：江口久美)



写真：交流会の様子

地域
LOCAL

L'ECHANGE

都市

URBAIN

コミュニティ
COMMUNAUTÉ隣人祭り
LA FÊTE DES VOISINS

La fête des voisins... 日本語で「隣人祭り」と訳します。この祭りの名前を聞いたことはありますか？ 私は昨年、大学の授業でフランス在住のジャーナリスト南谷桂子さんの講演を聞いて初めて隣人祭りの存在を知りました。今回はみなさんに、日本の中のフランス隣人祭りについて知ってもらいたく紹介します。

隣人祭りは1999年にパリのアパートマンで起きた高齢者の孤独死をきっかけに、住民たちがアパートマンの中庭に集まり、交流のための食事会を行ったことから始まりました。それは後にヨーロッパ諸国に広がりました。近年は日本でも広がりを見せており、新宿御苑でも開催されました。

祭りの内容は、隣人祭り日本支部のHP「開催と参加のしかた」に詳しく書かれていますが実にシンプルです。ご近所さんを集め、場所を確保し、互いに飲み物や軽食を持ち寄るだけなのです。南谷さんは、隣人祭りが世界中で広がっている理由として、「地域コミュニティの再生のためには『ご近所さん』とのつながりを円滑にしていくことが大切であり、一人ひとりが作り上げた関係は街に反映され、都市に反映されるといった社会的な意味合いを含んでいるから。」と仰っていました。それを受け、私たち学生は隣人祭りがこれから日本でより受け入れられていくには、例えば大学構内で学部同士で開催してみたら面白いのではないかな等の意見が意見があがりました。隣人祭りも地域のコミュニティに合わせて様々なバリエーションで行われるようになったら生活の潤いにつながると思います。気になった方はぜひHPにアクセスしてみてください。

隣人祭り日本支部 HP : <http://www.rinjinmatsuri.jp/main/>

(文責・佐藤鞠)



写真：2013年夏、パリを訪れた際に私が撮った写真です。パリの隣人祭りではこのようなアパートマンの中庭にテーブルを並べて住民たちが軽食を持ち寄って楽しむそうです。

写真家

甲斐扶佐義氏

京都からフランスへ

夜になると、人々にぎわう京都・木屋町の立誠小学校付近に、京都の文化人が集う一風変わった名物バー・八文字屋がある。年代を感じる店内には、氏の写真集などが所狭しと崩れる程重なっている。オーナーである甲斐扶佐義氏は、京都を代表する写真家であり、1972年から伝説的カフェ、ほんやら洞のオーナーでもある。本年6月には、甲斐氏はパリ・日本文化会館での展覧会を開催した。今回、L'Echange 編集部は、甲斐氏のフランスとの交流を通じた素顔に迫るべく、氏の写真とともに、氏の書き下ろし原稿を紹介したい。

— フランスとのつきあい

私の京都在住の生身のフランスとの付き合いは1973年からだった。それは、日仏会館の女性教師、エリザベートさんと出会い、彼女のシェアハウスに案内され、彼女のルームメイトを紹介されたことに始まった。気がついたら、それから40年以上、毎年、親しく付き合うフランスの友人が増え続け、今では、パリで私が写真展を開くと、懐かしい旧友が各地から集まってくれ、積もる話、京都時代の懐かしい話の花が咲く。若くして非業の死をとげたアーティスト、何億円の資産を友人に残した方の話など、ゴシップも含め、話題は尽きない。といっても、私のパリ展は、ストレートに始まったのではなかった。私の生活の浮き沈みもあり、また、喫茶店やバー経営不振がたたって、パリ展をやろうという声も掛かり、お膳立ても整っていても直ぐに対応できなかったケースも何度かある。動けなかったこともあれば、逆に、フランスの親友が私の展覧会の準備でパリへ行っていると称して、京都市内で雲がくれて愛人の出産に立ち合って、平然としているという日本ではレアで愉快（？失礼！）なケースもあった。



L'ECHANGE

文化

CULTURE

Spécial

Vie

Urban

Culture

Scène

Cuisine

甲斐扶佐義氏（写真左。右はクラシックギタリスト・ビエール・ラニョー氏）

1949 大分生、1960 カメラを持つ。1968 同志社大学政治学科入学（除籍）。1972 喫茶店ほんやら洞をシンガー・岡林信康らと創設。1977 処女写真集「京都出町」出版。1978 ワシントン州立大エバーグリーンでの海外展。1978 鴨川べりで大規模青空写真展開催。1980 出町国際交流センター、中尾ハジメ、中山容と開設。1982 京都市経済局で商業診断のコンサルタント。1983 S・ターケル著「仕事！」共訳。1985 ヤポネシアン・カフェ・バー八文字屋オープン。後に、京都随一の「文壇バー」と称される。「ル・モンド」「リベラシオン」も常備。1993 京都新聞紙上でフォト&エッセイをほぼ毎週連載開始。1997~98 京大総合人間学部特別（科研費）研究員として、ヨーロッパ、インドでの調査に参加。2009 京都美術文化賞受賞 出版写真集 40 冊を数える。

.....
甲斐氏による写真上：昼下りのカフェ
下：マン・レイの旧アトリエを訪ねる、サッカーの少年に遭遇



上図：“Kyoto derrière Kyoto” 展ポスター

ー パリへ

いずれにしても、パリへ「おい、それ」と出て行くのは容易ではなかった。私は、いまでは、軽々しくでかけていると勘違いされがちだが、実際は、腰が重く、つつい尻籠もりし続けていたのであった。赤ゲットよろしく、パリ展へと赴くことになったのは、2009年に、思いがけず「京都美術文化賞」をいただくという栄誉を授かり、ようやく、2010年から実現の運びとなった。日本ペンクラブの会員に推挙されても、東京の総会に出席するのは、おろか、会費も満足に払えない始末だった。当然、除名されて終わり、であった。にもかかわらず、流産続きだったパリ展が、この賞のお陰で、一気に実現し、次々とフランスで個展が出来るようになった次第だ。というわけで、最初のエリゼ宮前のギャラリー・グラン・エターナでの“Kyoto derrière Kyoto”展のヴェルニサージュには、村上春樹の仏訳者のコリーヌ・アトラン、ソルボンヌの文学教師で卓抜な私の撮影活動の寸評を自身の著書「タタミ・ポップ」に収録してくれているナディア・ポルキヤール、元神戸大学の教師でパリ第八大学の美術史教師のイザベル・シャリエ、私の京都の店でアルバイトをしていた息子と奥さんも一緒に駆けつけてくれた作家、ジャン＝フィリップ・トゥーサン等々が一挙に押しかけてくれた時ほど嬉しかったことはなく、ヴェルニサージュで、感極まってつい落涙するほどであった。

ー フランスの友人たち

これも35年以上の京都在住のフランス人たちとの付き合いの賜物だった。これらの友人たちからの「欧米で巡回展を！」という言葉に唆されても、これを支えてくれる友人たちの存在がなければ、おっとり刀で出かけることは出来なかったのである。この友人たちとの交友のためなら店が潰れてもいいかと思えるようになった。それほど私の写真を評価し、流布させてくれるパリのアーティスト仲間が徐々に増えて行っているのを、パリに行くたびに、いまでは、再確認している。それは写真や美術の世界を越えて、私と2人展をやりたいとの一流の音楽家からのオファーが出てくるようになった。しかし、なんといっても、私をパリ、フランスとを力強く繋ぎ留めてくれるのは「甲斐さんは、私のお父さん！」と言って、何時でも気楽に宿を提供してくれる映像作家のグザヴィエ・ブリヤ（『美味礼讃』のブリヤ・サヴァランの子孫）とファビアンヌであり、長年パリに住み続け、一貫して私の個展を企画し続けてくれる、昨年シュバリエに輝いたNPO〈エリゼ・クラブ〉代表の西川浩樹さん、初対面から私の店を訪ねてきて、いきなり店と私を題材に描き画集「ジャポネ」に収録してくれ、また、最初のパリ展に際して、引き続き、2人展に応じてくれたバンド・デシネの巨匠、エマニュエル・ギベールである。彼の強力なサポートには、本当に頭が下がる。当方はなんの準備もしてなくとも、パスしなくとも、可能性にかけてフランス各地でのアーティスト・イン・レジデンスの責任者に手紙や電話を入れたり、突然の話で当方は、全く準備不足なのに、アンリ・カルティエ・ブレッソン賞のために推薦状を本気で書いてくれたりするのであった。また、ルポルタージュ専門誌「シーモア《6月》」は、お前がいい仕事をしさえすれば、何時でもお前のためにページを割く用意がある、と言って発行者のサロンへ招いてくれたりした。この四月もロベール・ドアノーの孫のクレモンティーヌさんを派遣してきて、フランスのテレビ、ラジオの番組で私を取り上げてくれるように手配してくれたばかりであった。このような平生からのフランスのアーティストの支援のお陰で、2011年から、パリやエクサン・プロヴァンス等で1年に何回か個展を開けるようになった。実は、その2010年の個展行きが最初のパリ入りだった、と言っても今では、信じる人が少なくなってしまった。繰り返すが、それまでも何度もチャンスはあったが、90年代は育児やバーやカフェの経営にかまけて、つつい尻籠もりし、海外写真展旅行としゃれ込むことができなかった。腰を上げるきっかけは、遡るが、意外なところからやって来た。

— 初のフランスと個展

BARに陰々滅々と籠もりながら、写真を取り続けるのは、不健康だと京大の総人の研究者グループが救出の手を差し伸べてくれた。科研費での調査旅行にメンバーとして組み込んでくれたのだった。それで、ストラスブールを訪れたのが、初フランスだった。17年前のことだ。これで、店を離れたら、何もやって行けないという強迫観念からやっと解放されたのであった。後は、一瀉千里の如しである。無手勝流でなりふり構わず、写真家への道突っ走ることになった。パリ展の前に、ボストンやベルリン、ジュネーブ等での大規模な個展をやることになったのであった。これもバーのお客さんの呼び水があり、何時かは、パリ展をやるぞとの目標があったのであった。それほど、私にとっては、パリは格別であった。宿縁もあった。写真家としては、敬愛するアッジェ、ブラッサイ、ブレッソン、ドアノーのパリであり、憧れのパリであった。決まりそうで、決まらない奇妙な事件発生で、計画がいつも頓挫するパリ展であった。半ば諦めつつあったパリ展であった。バブル経済が弾けた後で、おいそれとは動けないぞ、と腹も括っていた。

— パリの持つ力

しかし、パリでの個展が、一旦、実現すると、後は、先述の友達が友達を呼び、熱い友情に包まれ、素晴らしい個展が次々と実現するのだった。日本では、売れにくいオリジナル・プリントは、パリでは、市民が普通に買って行くのには、また、感動した。ヴェルニサージュでは、いつも、国籍を越えてパリ在住のボヘミアンが糾合する事になった。まさに、パリという土地の持つ力があつた。中国、カザフスタン、イタリア、韓国から留学中の若者も集まった。そして、一流の音楽家が、演奏して祝してくれるのだった。それは、作品が気にいってのことだが、そういう出会いは、京都では、まだまだ少ない。パリの魅力は、例えば、祇園のような伝統的な建造物の区域が遍在しており、異文化が重畳化していることだ。私の写真作法は、一枚の写真に様々な要素を詰め込むことであり、それは、ドキュメントであると同時に、素朴な美意識に訴えたり、心理的に心地よかったり、想像力をかきたてるイメージを定着することだ。社会学的であったり、美学的であっても、一点の写真に中心がたくさんある写真が、すきだ。厚かましく、今後の個展の予定も紹介させてもらいたい。フランスからは遠いが、9月12日から11月16日は、オランダのシーボルトハウスにて個展。(この会期にあわせて、書下ろし『ほんやら洞の青春』《月曜社》を出版) また、カザフスタン展、サンフランシスコ展等も期を見て敢行する予定だ。

(取材：江口久美)



甲斐氏による写真：セーヌの古本屋さん

Fête nationale française

フランス革命記念日

毎年7月14日は、フランス革命記念日（Fête nationale française）。1789年のこの日、パリの民衆がバステュー牢獄を襲撃・解放し、フランス革命の発端となったことを記念して、現在ではフランス各地で祝典が行われる。日本では「パリ祭」として知られている。2014年7月14日のパリの一風景を、L'Echange 編集部がご報告する。

シャンゼリゼ通りのパレードは10時半頃から始まると聞き、10時に凱旋門到着を目指してホテルを出たが、これが大誤算だった。凱旋門近くのメトロの駅は軒並み封鎖されており、2駅手前で降りて歩き始めたが、シャンゼリゼ通りに近づくにつれ、人、人、人。事前に情報収集していなかったことを後悔するも、時すでに遅し。結局、親切な通行人に教えてもらい、比較的空いているアルマ橋付近にて、パレード終了後の車列の通過を待つこととなった。シャンゼリゼのパレード風景を期待されていた方には、誠に申し訳ございません（…もっとも、今回は別の仕事での短期出張滞在なので、事前リサーチ不足はお許しいただきたい）。

アルマ橋のたもとからエッフェル塔を望みつつ、迷彩色の軍事車両が通るのを眺める。パリのど真ん中を戦車が堂々と走る光景は、「花の都」とは相当に異質な表象である。戦車の上には銃を構えている兵士の姿もあり、まさに「軍事」のパレードだ。良くも悪くも、フランスという大国が、ある部分では軍事力に支えられてきたのであろうことを実感させられる。他方、沿道の観客のほとんどは、カメラや携帯電話でのパレード撮影に必死で、こちらは日本と変わらないという印象だった。

直接見ることはできなかったが、翌日仕事先で会ったフランス人から、日本からも自衛官数名がパレードに参加していたと聞いた。調べてみると、外国の軍事パレードに自衛隊が単独で参加するのは初めてのことらしい（※ UNDOF 部隊の一員としては過去にも参加経験あり）。

車列が通過するのを一通り見送ってからセーヌ左岸を歩いていると、パリ下水道博物館（Égouts de Paris）の入口案内を見つけた。都市のアンダーグラウンド愛好家としては、これは見逃せまい。チケットを買って地下に降りていくと、下水道がそのまま展示室になっており、すぐ下を本物の下水が流れている箇所もあった。パリの下水道や公衆衛生の歴史解説や、『レ・ミゼラブル』関連ネタなど、展示内容はそれなりに充実していて楽しい。ドブの強烈な臭いが鼻を刺すため長時間の滞在はキツイが、一味違うパリを見てみたい方にはおススメである。

というわけで今年の革命記念日は、軍事に始まり下水へ突入するという、どちらも日常を陰で支えていながら、いざ現前すると非日常感を覚えずにはいられない、そんなパリの一コマを体験した。それで満足してしまったことを、エッフェル塔の夜の花火を見過ごしたことの言い訳とさせていただきます、ひとまずここで筆を擱く。

（文責：菅原慎悦）

L'ECHANGE

風景

SCÈNE



伊地知雅シェフ

レストラン ラ・カシェット

ラ・カシェットは、フランス南東部、ローヌ＝アルプ地方のヴァランスという美食の町にある、2009年にミシュラン一つ星を獲得したフランス料理のレストランである。この店のオーナーシェフは、鹿児島県阿久根市出身の伊地知雅シェフである。伊地知シェフは高校時代に、同校の先輩にあたるホテルメトロポリタンエドモント名誉総料理長である中村勝宏シェフの講演を聞き、料理人を志した。鹿児島のホテルから、東京の中村シェフの元での5年の修行の後、渡仏、ヴァランスの三ツ星レストラン・ピックで2年弱勤め上げた。2005年に待望の自分の店をオープンされた。一つ星を獲得したのは、2009年3月であった。

伊地知シェフに美味しさの秘訣を問うてみた。シェフの答えは、下記の通りであった。①食材が一番、② assaisonner (塩・コショウ)、③ cuisson (火の入れ方) とのことである。ヴァランスでは基本的に食材が美味しく、それを経験に基づいて調理するそうだ。20年前のフランス料理と言えば、ソースをたくさんかけていたそうである。

8月、レストランでおまかせランチをいただいた。Drappier のシャンパンから始まり、日本のかぼちゃの夏トリュフと生クリーム添えのスープ、パンジーとカブシーヌの花と自家製トマトを添えたノルウェー産サーモンのカルパッチョと続いた。サーモンは野菜の甘酢・白バルサミコビネガーを用い、日本の漬け物のような油を抑えた仕上がりだ。白ワインは、Saint-Péray である。メインは羊の盛り合わせだ。写真左から、人参のフォンダン、背肉のロティ、トマトファルシ、もも肉、肩肉のコンフィである。フォンダンは、スライスしてバターで炒め、ミキサーにかける。コンフィは70度で36時間加熱するそうである。羊の美味しいところを丸々一匹いただいた。赤ワインは、2013年の Crozes Hermitage で、目が覚めるようなしっかりした味だった。デザートは二品でリモンチェロのソルベと、フランスボワーズとチーズフランスボワーズとソルベであった。どのメニューも素直な味で、とても美味しかった。

シェフは、日本人とフランス人の違いを、食べることに楽しみを見出していることと言う。シェフ曰く、フランス人を見ていると空間を楽しんでいるので見ていると楽しいとのことである。シェフはそうした感情を汲み取ってレストランの空間をつくっている様であり、周りを見渡せば、談笑する楽しそうなフランス人たちの様子が目に飛び込んできた。

シェフからの若者たちへのメッセージは、自分が目指すものがあれば海外に出た方がよい、大人になった時にまずは飛び出して色々な経験を積んで欲しいとのことだった。

(取材・江口久美)

伊地知雅シェフ



羊の盛り合わせ



レストラン ラ・カシェット





L' Echange



江口久美
Kumi EGUCHI

京大・人環

おかげさまで、第三号を発行できる運びとなりました。SFJTIも60周年を迎え、今回は様々な角度や時代から日仏関係に迫ってみました。特派員も随時募集していますので、学生さんなど、記事を投稿したい方は、ぜひお気軽にご連絡ください。



佐藤鞠
Mari SATO

上智大学フランス語学科

今回は大学の授業内で習ったフランスの「隣人祭り」について書かせていただきました。現在交換留学でパリ政治学院にてもう勉強中です。ついていくので精一杯ですが、この経験が今後の糧になるよう全うしたいと思います！



SS
ss

某民間研究所

SSさんは、相変わらず東西に飛び回り、お忙しくされているようです。編集の作業の中でもその独特な感性が生かされています。これからの活躍にも期待しています。(文：江口)

sfjti 日仏工業技術会

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生（東京大学名誉教授）が、1955年フランス大使館文化部（1969年独立して現在フランス大使館科学技術部）参事官（当時）C.d'Aumale氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内

Tel 03-5424-1146 Fax 03-5424-1147

E-mail: sfjti@t3.rim.or.jp

HP: <http://www.sfjti.org/>

日仏工業技術会では新規会員を募集しています
趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等を
問わず歓迎です。
下記 HP の「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入
の上、本会事務局までお送りください。

http://www.sfjti.org/nyukai_set.html

お気軽に左記メールか電話でお問い合わせください。



【交通アクセス】

JR 山手線：恵比寿駅東口下車 恵比寿ガーデンプレイス方面へ 徒歩 10 分

営団地下鉄・日比谷線：恵比寿駅 1 番出口 アトレ・

JR 恵比寿駅東口を經由 徒歩 12 分

日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て、日本とフランスの工業技術の紹介・普及、および両国の技術者の交流を促進することを目的として、1955年（昭和30年）に発足しました。両国と深い関係にある会社、研究所、内外の最新知識を求められる技術者、研究者、学生を会員とし、（公財）日仏会館傘下の学会の一つとして、様々な有益で最新の情報を会員の皆様に提供しています。

年二回配布する『日仏工業技術』は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「海からの贈り物」、「未来のプラスチック」、「iの時代、cの文化—情報通信に未来を探る—」、「色」、「からだの材料」、「原子力が繋ぐ日本とフランス」、「災害と国土」、「日仏の女性研究者たち」、「駅舎と高速鉄道」など、様々な切り口での特集を組み、底流に流れる文化の差異なども併せて紹介しています。昨年からは、若手研究者によるフリーペーパー『L'Echange』も発行し、旬なフランスの情報も提供しています。

また毎年、在日フランス商工会議所の会員とともに、金沢文庫、曹洞宗大本山総持寺、鶴岡八幡宮、江戸東京たてもの園などの日本の文化に触れながら、味の素（株）、三菱重工業（株）、（株）資生堂鎌倉工場&研究所、（独）日本原子力研究開発機構・東海村「J-PARC センター」、住友電工（株）横浜製作所、（財）鉄道総合技術研究所などの日本の誇る先端技術を見学しています。

さらに、日仏フォーラムとして、『日仏都市会議』、『日仏鉄道技術シンポジウム』、『日仏情報通信フォーラム』、『日仏環境会議 2008—都市生活と環境—』、『日仏原子力フォーラム—過去・現在・未来—』、『日仏水フォーラム』を開催し、日仏、日欧の情報の懸け橋となって活動を展開しています。

皆様に是非、ご入会いただき、ご一緒に活動できますよう、よろしくお願い申し上げます。

日仏工業技術会会長 高橋 裕



写真左よりシンポジウムの風景、資生堂研究所見学の際の集合写真、会誌の表紙例

入会申込書

入会申込日： 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員（5 千円/年） 学生会員（2 千円/年） （○で囲んでください）（いずれも入会金は無）
氏名	ふりがな： 漢字表記： 英語表記： 印
生年月日	西暦 年 月 日生
勤務先・在学先 （部署・学科まで）	
勤務先住所	〒 TEL： FAX： E-mail：
自宅住所	〒 TEL： FAX： E-mail：
会誌送付先	勤務先・在学先 自宅 （○で囲んでください）
学歴	大学 学部 学科 年卒業・見込 大学 研究科 専攻 修士課程 年修了・在籍中 博士課程 年修了・在籍中
専門	
通信欄	

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会
TEL : 03-5424-1146 FAX : 03-5424-1147 e-mail:sfjti@t3.rim.or.jp
振込先：みずほ銀行 恵比寿支店恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506
三井住友銀行 神田支店 普通 0952122